ISSUES #02

- ひとりの人間として積極的に関われる仕事を選び、コントロールするには何が必要か？
- これからの住宅のあり方、人・地域との関係性とは何か？
- 人と人との関係性をつくる距離感は、建築によってデザインできるのか？

EXTREAMER INTERVIEW

編集者という多角視点な仕事の経験を活かして人と場所、個性を活かした場づくりを

中村 光恵 氏

リトルメディア代表

大学院時代に新建築社のアルバイトを経て新建築社へ入社。
『新建築』の編集部を経て『新建築住宅特集』、『JA』編集長を経て2018年に独立。
合同会社リトルメディアを立ち上げる。「自分が伝えられることがどれぐらい大きな広がりに繋げられるかに興味がある、自分と言う小さなメディアとしての発信が多様な可能性へとつながる仕事のあり方を目指している」
現在3箇所の拠点を持ち、それぞれの場所の個性に合わせた運営を行っている。それぞれの場所で何かを行うことになったきっかけと、広がりをどのように作っていっているのか、お話を伺った。

小さな気付きを拾い集めて、広がりに繋げる

2018年に独立してから、自分が小さなメディアとして何ができるかを考えてきました。その中で、縁やきっかけのある3つの場所でいまそれぞれに事業を行っています。ひとつが新建築社での編集者時代に取材に行って住むことになった森山邸（2005年竣工　設計：西沢立衛）で行っている「もりやまてい あいとう」です。森山邸はボリュームの異なる分棟10棟からなる集合住宅ですが、そのうち天井高さ4.3mあるワンルーム「I棟（あいとう）」が2020年5月に空室となったのでリトルメディアで借り上げ、そこで「ひととき住人」という時間賃貸にて場所貸しの事業を始めたのです。森山邸という場所をもっとみなさんに知ってもらうこと、それから今後の森山邸の維持管理を目的として始めました。いま少しずつ周知が広がり、意識の高いクリエイターのみなさんがさまざまに森山邸とコラボレーションしてくれています。オーナーの森山さんのセンスや人柄が人を呼んでいるといっても過言ではなく、私はそこを見守りつつ、みなさんとの関係性を構築していっています。（https://moriyamatei-aitou.com/）

もうひとつが私の実家で住宅を開いて行っているマルシェマーケット「いち」です。この「いち」は、母と妹が10年ほど前から実家でやっていました。パン職人の資格を持つ母が焼くパンや、さまざまな物をつくる近隣の作家さんたちの作品などを週に一度販売しています。販売行為は開くためのツールで、買いに来てくださる人たちとの交流がこの場をつくっています。ほかの郊外住宅地と同じように、若いファミリーがいる一方で高齢化、独居の方も少なくないエリアです。そういった方達は街に出ることすらできない人もいます。でも徒歩圏にこういった場所があることで最小単位のセイフティネットになります。小学生が学校帰りにトイレを借りに来たり、もちろん遠方からゆっくりしに来てくださる人もいます。その様子を見て、住宅のあり方の可能性を感じました。もちろん、住宅だけではなくそこにいる人が何より重要です。リトルメディアとしては、この場所と人の可能性を広げ、かつ今後の住宅のあり方についてを考えていく試みとして、新たな場所「いちこや」の建設を目指しています。（詳細 https://www.hanakoganei-ichi.com/projects-3）

それぞれに特徴の異なる場所ですが、小さな点をつくり出し、ボールを投げる距離感を変えるだけでまったく異なる運営や関係性が構築できます。仕事を選ぶというより、そこにある何かにどう気づき、自分はそこでどんなメディアになれるのか、常に身の回りの小さな気づきを拾おうとしている感じです。

場所（地域）という不思議

いまもうひとつ、銀座で場所をやっています。2018年からお手伝いすることになったお店の閉店に伴い、別な場所にお店をつくってみることにしました。お酒も接客も素人なので、業態を一言で表すのが難しく、銀座では異色のお店かもしれません。銀座という場所柄、いらっしゃる多くはビジネスマンの皆さんですが、人の仕事の話を通して、さまざまな世界の情報や状況に触れることができます。また、こういった場所をひとりでどう運営していくかといった時、どのように人と話ができ、その人のことをよく知って「楽しい」と思ってもらえる場を提供できることが何よりいちばん大切です。そのことは、どの仕事においても通じることで、場所、人、仕事がどう変わろうとも、いま目の前にいる人が楽しいとか、笑顔でいてくれるために何ができるか。場所によって関わる人のあり方やボールを投げる距離はさまざまですが、場所と人を考えることは根本的には同じであると、感じています。

デジタルかアナログかではなく

コロナという契機を経て、人と対面せずコミュニケーションするツールは多様化しています。今後の社会はそういった方向により加速していくでしょう。さまざまな関係性づくりが技術によって発展する一方、同じように人と場所の関係性における多様な価値観も増えていくのだと思います。小さなきっかけを拾い上げる感度を持ち続けていたいです。

Interview ／ 2021.08.05 CORIDO_ura @ 銀座